

709
15

大日本平和協會編輯

平和論集

339-15



平
和
論
集

明治
44.12.15
内家

平和論集

平和大使へ賜はるる勅語

朕常に世界平和の維持に眷々たる
に今回特に卿を遣して平和會議に
列せしむるに當り卿能く此旨を
體し以て事に従へ

明治四十年四月十九日

平和論集目次

一平 和	伯爵 大隈 重信
一平和と國際法	法學博士 寺 尾 亨
一平和問題	貴族院議員 鎌 田 榮 吉
一平和の趨勢	東京市長 尾 崎 行 雄
一軍費負擔者の自覺	男 爵 澁 澤 榮 一
一戦争と平和	法學博士 高 田 早 苗
一平和と日本國民	前代議士 江 原 素 六

一 世界平和の目的は如何にして成就せらるべきか	法學博士 浮田 和民
一 海牙會議へ送りし書簡	伯 爵 板垣 退助
一 平和の意義	伯 爵 板垣 退助
一 平和の目的	伯 爵 板垣 退助
一 平和の實現	伯 爵 板垣 退助
一 平和の障礙	伯 爵 板垣 退助
一 平和の前途	伯 爵 板垣 退助
目次	伯 爵 板垣 退助

平和論集

平和

伯 爵 大隈 重信

「天に榮光、地に平和あれ」とは、世界開闢以來、人類の絶えず唱道するところであるが、歐洲諸國では、かの普佛戰爭以後四十餘年、内亂の外は一回も干戈の交へたことがない、今や平和的氣氣がそれとなく各國民の間を包擁するに至つた。この平和思想の増進は關して種々なる原因がある。武具の發達して破壊が益々強大となつた結果、戰爭の慘害を怖るゝ念を生じたことも其一だらう。經濟上の發達はあらゆる事務を犠牲に供せしむるに至り、戰爭のために却つて經濟上の損害を蒙ることを怖るゝ念を生じたことも其一だらう。

交通運輸の機關が發達して弱小國も直ちに強大國の力を藉り得るから、一國が孤立して横暴なる行動をとる事能はざるに至つた事も其一たらう。雖然、其最も重要な原因と謂ふべきは、蓋し軍備の擴張に伴ふ國費の膨脹と共に、愈々苛税の誅求甚しいから、唯り各國下層民とはいはず、上中流の階級と雖も、漸く生活上の痛苦を夫々相應に感ずるやうになつたことである。そこで、各國の政府も社會救濟策を主なる政綱となすにあらざれば、忽ち上下國民の不信任を招く趨勢となり、各國は皆内治に忙殺されて、何れの強國も、自在に手を外交に染むること能はざるに至つた。英國然り、佛國然り、獨逸の如きは其隆大なる國運を以てして、尙且つ社會救濟策に全力を注がざれば、内閣を維持することが出来なくなつた。即ち武裝的競争は延びて物價の騰貴を來し國民一般の生活難を惹き起したのである。そこで文明諸國は國防と内政とは兩立し得ず、帝國主義と社會政策とは併行し得ずといふことを漸く認めるやうになつた。況んや、諸種の社會的運動の發達は國籍の區別を問はざるに至り、殊に平和運動の著

しく効果を收めつゝあるを見れば、平和思想の増進は決して一時的現象として輕視することは出来ない。瑞典の化學者ノーベルは實にこの平和運動の魁首で、爾來、志を平和事業に潜むるものが續々輩出し、遂に露帝の萬國平和會議提唱となり、第二回平和會議を経て、歐米諸國間に仲裁條約の締結となり、米國は今や更に一般的の仲裁條約を提議するに至つた。嘗ては最も強硬なる態度を以て仲裁條約に反對した獨逸も今日では此一般仲裁條約の加入を拒絶せざるに至つたのである。

夫れ、四海は兄弟である。大空の下に棲める民等は、人種の如何に關せず、宗教の異同を論せず、皆これ同胞である。人類先天の義務は、人と人と相愛し、國と國と相睦みて、世界の平和を來すに在る。この義務を受けて人道と稱するのだ。謹んで陛下の御製を拜誦せよ。

よものうみ みなはらからと おもふ世に
などなみかせの たちさわくらひ

平和と國際法

法學博士 寺尾 亨

凡そ法律の目的は人類社會の安寧秩序を維持する者なるが故に、國內法は一國社會の暴力を排除して其秩序を立つ可く、國際法は國際社會の暴力を排除して之れが秩序を立つべきものなり。秩序の維持暴力の排除即ち平和の意に外ならず。故に平和は法律の目的にして、國內法は一國社會の平和を維持し、國際法は國際社會の平和を維持するものなるや明なり。而して國內法は其國內に於ける平和を目的として、其目的を達しつゝあると同時に、國際法は國際社會に於ける永久の平和を目的として其目的を達せざる可からず。然るに同一の目的に對して國內法は其目的を達しつゝあるに拘らず、國際法が未だ其目的を達し能はざる所以は、一は國際社會の組織一國社會の組織

は決して鞏固ならざるを、一は國際法の發達國內法に及ばざるに因らざるべからず。之を純理上より見る時は、前二者の改良進歩如何に依り其目的を遂行すること必しも不可能にはあらざらん。唯世間往々夫の永久の平和論を以て空想なりとし戰爭者なるものを唱ふる人あり。其説も所を觀るに一理なきに非ずと雖も未だ以て正鵠を得たるものと認む可からざるに因り、今試みに之れが駁論を爲さんか。

(一)夫のメーウツツの進化論の示す如く、人間間は生存競争ありて弱者は繁を弱者は衰ふ。故に戰爭は眞理にして平和は眞理に非ずと。

戰爭は眞理に非ずして眞理は平和に在り。若し人類を以て社會的生物とする前提を認めらば、平和は非ずんば其共存の目的を達す可からず。弱肉強食は決して共存の途を塞ふる所以ならず。故に眞理は彼にあらすして此に在り。

(二)戰爭は其勝敗殆んど知り知るべからざるものあり。其開始や機微、其勝敗の分る、所亦機微、且戰場に斃るゝは名譽の極點にして此名譽は神意に出づ。故に

戦争は神意なりと。

戦争は神意にあらざる人意なり。戦争の開始せらるるは國家の慾望又は權利の防衛に依るものにして即ち國家の意思如何にあり。即ち又人爲に出づと稱し得べし。其勝敗の如きは平素の訓練、士氣の旺盛、技術の巧緻、堅忍不拔の精神、愛國の至情等に基因するものなれば何づれか人意の外に出でざる無し。之を偶然とし惹て神意に歸するは大いに誤てりといふ可し。

(三)古來文學上の材料は多く之れを戦争に採れり。希臘時代のホーマーの如き又我國諸曲の如き皆材料を戦争に採れり。音樂に於ても雄大なる作曲は戦争に關し、繪畫亦然り。是等の點より觀察すれば戦争は美の觀念に適すと。

戦争は美の觀念に適せず。昔時文學の材料を戦争に採りたるは美の觀念に適したるに非ずして唯其時代の嗜好に投じたるのみ。古代人民は風俗粗暴にして闘争を好みたるは怪しむに足らず。又戦争的音樂に至つては壯は則壯なりと雖も音樂の本旨たる優美

高雅の點に於ては他の材料に及ばざる事遠し。又戦争畫は高尚なる美術眼に値せず。思想幼稚なる普通一般人を喜ばしむるに足るも、吾人は寧ろ花鳥山水等天然の材料却て豊富にして且つ高尚優雅なる美術思想に適するを見る。加之戦争其者に思ひ至らば屍の山を築き血の河を流すを見て誰か之を美なりと言ふを可べきぞ。

(四)戦争中は國民の愛國心其焦點に達し、平素閑牆の徒も舉國一致國難に當るの美風を生じ、且つ近親間の愛情を増すは勿論、未見未聞の人の勇猛義烈の舉動に對して同情を寄する等人性の道義心大いに發揮せらる。加之一國の太平久しかば、或は奢侈淫靡の風をなし或は晏安遊惰の俗を生じ人心腐敗すべし、之れを防止するは戦争なりと。

戦争は徳義心を發揮すとの點に於て多少同意すべき點なきに非ず。然れども是等の點を以て戦争は善事なりとの決定を下すは誤謬たるを免れず。虚心平氣に觀察すれば何人も善惡ならずとも云ふ者なかるべし。人を殺し家を焼き財を盜む等一國社會の個

人としての罪惡が其團體たる國家行爲として罪惡ならざる理由何處に在る。且徳義心の發揮は多く危急存亡の際に顯るゝを常とすれ雖、併も必ずしも戦争の如き場合を待つを要せず。風教の方に依るゝを常道とし殘酷悲惨なる戦争の方に依るゝを用ひんや。又舉國一致の精神も世界に國を立つる國民は須らく平時に其覺悟無かる可からず。戦時初めて之を得んとするが如きは健全なる行爲に非ず。

要するに戦争哲學は一個の奇論に過ぎずして眞面目のものに非ず。平和は國際社會最後の目的にして、國際法の目的亦之に外ならず。其目的を達するは、國際社會の改良と國際法の進歩如何とに在るのみ。

平和問題

貴族院議員 鎌田 榮吉

世に平和論あり戦争論のあるは人間に固有せるエミチーとフミチーとの兩性の發顯であるかとおもふ。その昔未だ野蠻であつた時代の人間はエミチー即ち憎他心が非常に熱烈であつた。そこで個人間は勿論他郷、他邦の者に對して排外の念が強烈であつた爲めに血を流して争ふと云ふ事が多かつたのである。けれども優勝劣敗の作用に依つて併呑又併呑せられて在昔無數の小民族小邦國が現時の有數列國とまで纏つたのも又是れ戦争の効果によつたものである。

然るに世が次第々々に進んで行くと共に人間も亦その性情を換へて行くのは當然なることで、即ち憎他心は次第に減退して愛他心の方が次第々々と強くなつて來た。此

子だとか釋迦だとか基督だとか云ふ聖人はこのアメリカの方の必要を説いたものである。人間も時代と共にこの念が強烈になつて、遂に平和を好愛する念となり戦争を厭ふの心ともなつたのである。評言すれば戦争はエミチーの發現下、平和はアメリカの發現であると思ふ。人の性情が文化せられてエミチーよりアメリカに移り換つて行くが故に今後の世界は益々平和論に傾くべきはこれまた自然の趨勢であらうと思ふ。

元來この平和運動と云ふものは宗教が其魁けをしたものである。同胞相争ひ、血を流し肉を傷ふるなど云ふ事は神の旨に副ふ所以でないと云ふ宗教的運動に加ふるに學者の永久平和論なるもの、出顯もあつた。それは列強が相争ふて軍備を擴張するは甚だ愚な事である、甲が一割軍備を増せば丙も一割増す其結果只民力を疲らすの外何物もない。殊に無意味なる次第であるから何とかして此の苦痛を免れんとして種々の考案を凝らしたのも大に勢力となつて居る。それから又經濟學上に重商主義を排して商業貿易は相互の利益となるものだと云ふ理屈の分つたのが國際間に戦争を減少した

のと、是等の諸勢力が集合して遂に世界的平和運動となつたのであると思ふ。それと共に又一方には軍備擴張に伴ふ經濟上の反動も之を助くるに多大の力あることを知らなければならぬ。

併し全體に平和を愛するは文明國民の常情である。現に我國に於ても天下泰平、國家安全は徳川時代には日本全國民のモットーとなつて居つた。但し從來の如き武裝的平和では安心が出来ぬのみか其入費に堪へられない又之れがために各文明國には追々々危険思想が盛になつて来る。そこで世人は武裝解體の眞の平和を欲求する。これが即ち世界的平和運動で、宗教以外の各階級よりも唱道せらるゝ事となつたのである。時代の欲求として出現したのである。實に天下の聲である。文明の叫びである。それが故に偉大なる勢力を有するに至つたものである。有力なる所以でもあるのである。所謂徳川時代の天下泰平國家安全五穀成就商賈繁昌を押廣めて世界的にしたものが今日の平和運動であると思へばいゝのである。その結果は仲裁條約など云ふやうなもの

出頭を見るに至つた。仲裁條約と云ひ、萬國平和會議といひ、これだけ世界に於ける軍備擴張を防止し又戦争絶滅に効果があるかは私の知る處ではないけれど、一種の方法一種の手段としてはよいものたるに相違ない。必ず多少貢獻する所のあるべきは疑ふべからざると思ふ。

斯の如く一面に平和運動が隆盛になるけれども軍備の縮少は勿論のこと軍備擴張の中止さへも出来ない。否、列國は後れざらむことを恐るゝの状態である。彼れ一歩進めば我れ又二歩を進むの有様で底止する事を知らぬ。國力を傾け財政を賊ふてまでも軍備擴張にこれ努力しつゝあるの實際で、吾々には到底その結局を打算するさへも困難に思はれる位である。然り、然らば列國のこの軍備を以てし擴張に亟ぐに擴張を以てせるその兵力を以て大に戦ふことが出来るかと云へば、遂に答へに窮せなければならぬ。明白に云へば、この軍備と兵器とを有しながら戦ふことが出来ないものである。否、寧ろ軍備の擴張其物が却つて戦争を防止すると云ふ事實になつて居る。尤も絶對

的に出来ないとは云へないけれど、容易に出来ない。國際的に纏綿せる經濟、其他の關係は決して昔日の如き單純なるものではない。

かくの如く各國の經濟關係が密接になればなる丈け戦争は出来ないことになる。余は彼の日清、日露戦争の如きも、若し露清と我が國との間により多く經濟上密接の關係があつたならば交戦するが如きことは出来なかつたであらうと思ふ。それで今後各國の間に密接なる經濟關係が出来れば出来る丈け、戦争は出来なくなるに相違ないと思ふ事は歐州の近狀に徴して斷言することが出来ると思ふ。

この經濟關係以外に未だ戦争の出来ない有力なる原因がある。それは社會上の原因である。各國人が組合的に商業工業をもすれば結婚もする教育もする交際もする。そこでいざ開戦となれば敵國には或は父母在し、兄弟住し、相思の愛人もあると云ふやうなことになる。骨肉の關係は人心を鈍らすの道理、是等が集積して常に戦争忌避の輿論を構成する。遂に思ふ儘の行動も妨げられることになる。未だこの外にこの種の

原因は數多いことであらうと思ふ。

筒様にして一面には經濟關係あり、人情關係あり、遂に國力を傾注した軍備も用ゆるの處なき事になつて來つゝある。雖然列強は虎視眈々の態度であるから遂に今日に於て軍備擴張は中止する事が出來ない。然し此の擴張せる軍備は取りも直さず平和の保障となつて居る。而して世を舉げて平和を希望して居る、世界的平和運動は開始せられてをる——軍備擴張を中止若くは廢棄して丸腰の平和の來るは何れの日か余の豫測するに難い處であるけれ共今日の世界の趨勢は戦争し様とするとも出來ない事になつて居るのである。換言すれば武裝したる平和の時代である。併し軍備費の増加に堪へ切れなく成つて居る。此の馬鹿々々しい苦界を脱せんとするストラテグルは必ず早晩丸腰の平和を見るに至るであらう。要之、今日の平和運動なるものは時勢の促進に依れる必然の結果であつて決して空想に終るものでない。假令争闘は人間社會に止まなうにしても必ず次第に其形を變じて戦争なるものは消滅に歸すべきは疑はない。

平和の趨勢

海牙第一祝賀會に於ける講演

東京市長 尾崎行雄

本日の會合に對し一言祝辭を申し上げます。平和の希望は只今浮田博士より述べられました通り御同様のことと存じます。世間には尙ほ是は夢であつて、容易に實行は出來ないものと考へて居る者もあるけれども私はたとへ夢であつても、この夢は正夢にしなければならぬと思ふ。第一に陸海軍の武器が日々精銳になると云ふことは既に平和に近づいてゐるのである。是は武器が精銳になればなる程戦は仕悪くなる、人の死方が多くなるのであります。死ぬと云ふことは各國人皆欲しない所である。第二は陸海軍の兵員及軍備が殖えれば、殖える程費用が増大する譯であるから、中々やり切

れない。第三には列國交際が益々親密になり、交通は頻繁を加ふると云ふ譯であまりすから地球は昔の十分の一位に縮まつてゐる。尙この上百分の一、十分の一になればそれだけ地球は狭くなるのであるから、喧嘩の出来やう筈がない。即ち交通機關が發達すればする程平和になる。それから第四には、若も戦争が起つたとすれば今迄やつてゐた貿易と云ふものが、其戦争がたとへ勝つても負けても其將來に關係する所頗る大であることは云ふ迄もなく、即ち貿易の進歩は平和を近からしめるのである。第五には富の性質は昔は現金で蓄へて居つた富が今日は信用が富である。この信用なるものは戦が起れば勝つても敗けても、破壊せらるゝのであるから、國民は其破壊を恐るゝのであります。

斯の如く觀察し來れば世界の各方面に於て毎日々々兵隊を訓練する事、軍艦を造る事、人を殺す機關を發明すること皆平和の道行である。時々刻々平和に進みつゝあるのであります。殊に飛行機の發明が出來て、今の自動車位盛に行はるゝやうになれば

平和に近くのであつて、是に對する所の防禦に中々今日の海軍に對する防禦所ではない。それ故是も平和の利益である。要するに各方面から平和に近づいてゐるのであります。殊に教育の進歩が著しく、いかに此武事教育をしても、戦争の教育をしても、人間の腦髓を研きさへすれば平和の大原因になるのである。腦髓が緻密になつて、研かれさへすれば、血を見て喜んだ人間も、血を見れば如何なる勇者と雖も蒼くなる。人間が血を見て蒼くなると云ふことは平和を喜ぶのであつて、其人間は慥に進歩したる人間であります。殊に教育の進歩と共に人口の繁殖は漸々減るのである。佛蘭西は無論の事、英吉利でも、亞米利加でも獨逸でも人口の繁殖力は少なくなつてゐる。然るに是と反對に一方に於ては兵隊は大に殖えてゐる。一方に於ては人口が減ると云ふのに、兵隊を増加すると云ふことは、どうして長く續くことが出來やうか、戦は出來るものでないのであります。

兵隊が殖えれば、殖える程又人口の繁殖力が減れば減る程、是も平和になる原因で

ある。何れにしても、戦があつたとするれば其國は勝つても負けても衰弱してしまふ、勝つても負けても信用が破壊せられるのでありますから、國勢不振と云ふことにならる。即ち今日の状態は皆平和に近づいてゐるので、今日の如き祝日を祝ふと云ふことは、天下舉つて進みつゝある所の平和に一步を加へると云ふ主意になるのである。「言述へて、祝辭に代へます。

軍費負擔者の自覺

男爵 澁澤榮一

軍備制限の問題は決して新しい問題ではない。己に多年の懸案であるが、只だ最近に至つて軍備の擴張が愈々大袈裟になり、従つて國民の苦痛が益々甚しく爲つて來たので、問題の解決が著しく促進されて來たのである。彼のカーネギー翁の如きは、早くも此の趨勢を看破し、偉大なる自己の資力を平和運動のために寄進し、之に加ふるに哲學上の新見識に基き、敢然として平和論の先驅となり、此の讚美す可き新運動の宣傳に多大の貢献をなした。其他最近我國に渡來したデヨルダン博士の如き、種々なる方面から戦争の害毒を説き盡して居のであるが、未だ各國の軍備を制限する迄の實勢力を有するに至らない。亦最近世界の經濟學者はベルン市に集會を開き、此の平和

運動に就て大討論會を試み、現に我國からも一人の委員が之に參列したのであるが、然かも未だ各國の軍備問題に對して、適切有効なる決議をなすに至らなかつた。事情已に斯くの如し、一擧にして世界各國の軍備を制限する方法は、到底今日に於て豫想し難く、我輩にも固より之に對する有力なる腹案もない。當に我輩許りでなく、世界の碩學鴻儒の徒が如何に考慮を巡らしても恐らくは永久に案出せられない事と信ずる。然らば、無際限なる軍備の擴張は、到底停止するの期なかる可きかと云ふに、必ずしも其の然らざるを信ずる者である。

今日の平和運動は、其根底の一半を宗教的の博愛慈善の思想に据えて居ると共に、亦一方から見れば、軍備負擔の苛重に苦しむ苦痛の叫び聲であり、軍備擴張に對する納稅者の自覺であるとも解せられる。この自覺は向後軍備の擴張に伴つて益々世界的となり、終には一種共通的の實力を有するに至るのであらうと信ずる。即ち無制限なる軍備の擴張は、結局自ら擴張を不可能ならしむるに至るのである。更に論歩を進め

て考究するに、何れの國を問はず、無制限なる軍備の擴張は、必ず生産事業の荒廢を意味する。而して軍費なき軍備は何等の威力を有せざる以上、生産力に乏しい國の軍備は、如何に精銳を極めて居るにしろ、終に何等の働きもなし得ない事となる。之は甚だ漠然たる論理上の推論に過ぎないが、然かも、軍備の制限は、此の恐る可き推論に基く國民自覺の向上に依頼しなければならぬと信ずる。従つてカーネギー、或はヂョルダン博士の如き個人の運動は固よりのこと、彼の萬國平和會議の如きも、共に此の自覺心を向上さする手段として、甚だ慶賀す可きは勿論である。

更に軍備制限の方法として、將來或は多大の勢力を有するに至るであらうと信せらるゝは、彼の仲裁條約の普及である。過般調印せられた英米間の仲裁條約は、之に佛國を加ふるも、未だ列國の軍備問題に接觸するまでに進んで居らぬのは勿論の事であり亦た此の仲裁條約が果して如何なる結果を來すかも今日の所では全く不明である。亦た仲裁條約に附する紛擾の範圍、若くは事件も或一局都に限定されて居るが、然も

其精神に至つては、明かに國際間の係争は成る可く平和の裡に、換言せば兵器を用ひずして之を解決せんとする、一種の平和運動と見て差支ないと思ふ。若し世界の有力なる強國が互に協同して仲裁條約を作り、之に由つて國際間の凡ての紛擾を平和の内に解決し去るの時機が來らば、其時こそは、列國の軍備は自然に且つ容易に制限し得らるゝであらうが、之は今日の處では不幸にして未だ一種の夢想に過ぎない。

さらば軍備に對する國民の自覺が大なる勢力となつた曉には、各國の軍備は全く撤廢さるゝかと云ふに決して然らずと信ずる。國家として又國民として、相當の武力を必要とするのであるが、只實際の軍備は決して侵略を事とせず、各國共に國を守らんがための軍備に過ぎない。或者は、斯の如くせば再び無制限なる軍備擴張を繰り返すと同一の結果を來すではないかと難するかも知れぬが、此の際に云ふ所の軍備は、國民の生産能力、若くは、國民の所得を比例する軍備である。國民の生産能力を破壊し滅殺しない程度の軍備である。亦た難する者は、各國の富力の相違する以上は、個人

の所得にも、大なる相違を免れない。然らば所得に比例する軍備の大小も亦當然相違するではないかと云ふかも知れぬが、そは難者の云ふ通りである。然しながら各國の當局者及び人民が戦争の害毒を知悉し、軍備の大小は自然に其國民の生産能力に一定の比例を保つまでに進歩した以上、兵力は事實無用に歸し、凡ての事件は兩國政治家の手腕に由つて解決さるゝに至る事と信ずる。然も此の事たる前途甚だ遠遠の嫌があり、亦た當面の問題に對する解説としては甚だ有効適切でないかも知れぬが、軍備制限の方法としては、各國民自覺の向上に訴への外、他に良策なきを信ずるものである。且つ又た一國に侵略を事とする國家の財政は必ず衰頽を招ぎ、終に其國の悲運に陥つた事は、史上の事實に照しても明かなる以上、此の軍備制限に對する國民の自覺の向上、此の軍備制限に對する國民の自營の向上に意を潜むるのは、現代の政治家が有する重要な職責の一つであると思ふ。予は此の點に關して我當局者の反省を煩したい事が甚だ多い。國民所得の増加に比例して軍費負擔の最も苛重なるは、恐らく我國は

世界第一に位して居る事と思ふが、然るにも拘らず、我が軍事當局者は今回又を大擴張を計畫して居ると聞く、斯の如く富力の強大なる國を相手として、渠が三隻の軍艦を建造すれば、我も亦た三隻を造らざるべからずとの無謀なる擴張を繼續するに至らば、國家の將來は果して如何に成り行くであらう。現在我が國の軍備が、敢て侵略を目的として攻勢を取らざる以上は、今日の程度を以て必ず充分であり、亦之丈の軍備があれば國民は安じて、國際間一切の係争を我が外交當事者の手腕にお任せ申す者である。(太陽所載)

平和と戦争

法學博士 高田早苗

戦争と云ふものを軍記で讀むたり講釋師の口から聞くと、如何にも勇ましいものであつて左程忌まはしい事の様にも思はれぬのである。去り乍ら筆の上や口の先で所謂美化したるものと、有りの儘の戦争の事實そのものをも比較して見れば、其間に香壤の差のある事は論を待たぬ。二人二人の人の死ぬるのであるに悲しむべき事であるのに、是れは即ちゼネラル、スロチターとも云ふべきものであるから、其の厭ふべきことと思ひべきことは想像に余りありと云はねばならぬ。戦争直接の光景が己に酸鼻の極であるに、其間接の弊害に至つては始て筆舌の能く言ひ盡くし得べき事ではあるまいと思ふのである。極言すれば戦争は人類の野獸的性質の曝露したものである。人類が剝奪

銃砲を執つて相争ふのは、野獸が其の天然の武器なる角を振り牙を磨き爪をといで相争ふのと大なる差別はない。只國家を守る爲めに戦ひ、同胞兄弟を救ふ爲めに争ふと云ふ事のために、高さ意味深き意義を生ずるのである。けれ雖これと同時に、戦争に因つて國家を守り國民を保護する必要ある間は、人類は未だ全く野性を離れる能はず、獸的素質を未だ脱する事が出来ぬと云ふ事が證明されるのである。若し人類なるものが、其れ自ら唱ふるが如く果して萬物の靈長であるならば、戦争なるものは遂に全く止むで、萬國協和四海兄弟と云ふ時代がイツか一度到着しなければならぬ筈である。

人類が文明に進むと共に、戦争は次第に止むで平和の時代が遂に到着すると云ふ事は如何にも空想の様ではあるが、然しながら過去に因つて未來を察すると、其の必ずしも空想ならざる事が思はるゝのである。戦争は騒がしきものであるが平和は静かなものである。静かなるが故に目に立ち耳に聞こゆる事が極めて幽かであるけれども、過去一世紀又は數十年の間に、戦争の大に減じて平和的勢力が甚だしく増進したと云

ふ事が、少しく歴史的眼光を供るもの、皆認むる所である。迂遠なる學者做々たる集會に過ぎなかつた所の平和會議なるものも、遂に冷かなる事實以外耳を傾けざる列國政治家の大會議となり、遂には仲裁や判所を常設する様になつたと云ふ萬國平和會議の發展の跡を尋ねて見ても、平和の勢力が、暗々の内黙々の間に如何に増進し來つたと云ふ事がよく分るのである。而のみならず戦争其のもの亦、平和を促進する一大要素であると云ふ事も確かに云へるのである。武裝的平和なるものも、假令正道にあらずして權道なりとするも、王道にあらずして權道なりとするも、確かに平和の大原因であることは明かである。即ち戦争の準備に因つて反つて平和は維持さるゝのである。武器の進歩が平和を持ち來すと云ふプロツホの意見を今更事新らしく述べ立てる必要もないが、然し乍ら此も確かに事實に因つて立證するべき明論であるに相違ない。武器が進めば敵味方の近よる事が出來なくなる。余り遠ざかれば戦争も喧嘩もして見様がなくなる道理である。又破壊的殺人的の道具立が益々供はれば供はる程、新工夫が出

來れば出来る程、互に恐るしきが増して來て遂に戦争が止むに至ると云ふ事も決して架空の論であるまいと思ふ。人類は確に萬物の靈長に相違ないが、現今は未だ靈長に成かへりであるから、偶々戦争もするのであつて、随つて各國民が其準備に忙がしいのであるが、遂には絶對的平和の時代が到着するに相違ないと深く信するのである。

人類は天性政治的動物である。一日も政治的社會を出づる事が出来ぬのである。さうながら、人類が當初より現今の如き大政治的社會に棲息したものでないといふ事は、固より明かなる事である。家族よりして種族、種族よりして小國家、小國家よりして遂に今日の大國家に至つたと云ふ事が果して事實ならば、かの社會學國家學が教ふる事が果たして嘘でないならば、將來は益々進むで大なる社會を形成すべき道理ではあるまいか。此處までも團結を大きくして來たが此れが行き止りであつて、この先、より大なる團結を形成しなければならぬと云ふ理窟は如何にしても見出し難いのである。成つて見なければ確かなこととは云はれないが、古きを温ねて新しきを知り、過去を以て未來を

推すと云ふ事が許さるゝならば、四海兄弟天下歸一が人類發展の究極である。それを理想と云ひ得ると思ふ。元より天下歸一四海兄弟と云ふ事は國家的區別の消滅を意味さない。專ら國家と國家とが、絶對平和的關係に於て對立すると云ふ事を意味するのである。勿論小未來に於て斯の如き事の行はるべき筈がないが、萬物の靈長たる人類の大未來はソユにあるのではあるまいか。進歩と云ふ事、文明と云ふ事はソユに達する道程であつて、この理想に近寄ると云ふ事を意味するのではないかと思ふ。

或は絶對的平和の時代が來たり戦争が止むと云ふ事になれば、人類の進歩は遂に止むに至ると云ふ説がある。人類は競争に因つて進歩する、争ふと云ふ事のなくなると同時に進歩發達と云ふ事がなくなると云ふ筈である、平和の裏面には腐敗と云ふものがあるといふ説をなすものがある。これも一應尤もなる議論の様に聞こゆるけれども、要するに戦争と醜態と云ふ事を混同するがために斯の如き説が生ずるのではないか。人類の國々未來永劫争はなければならぬ然し乍ら争ふべき事と、争ふべからざる事

どの區別がある。又争をなす手段にも善悪邪正の區別がある。例へて武器を執つて相打ち相殺すと云ふ事をしないからと云つて、各國の國民が競争すべき手段目的は他に幾許もある様に思はれるのである。戦争が止んで平和の御代となる曉に於ても、各國民の相互に競争すべき事柄は少なからず存するのである。即ち人類の幸福を増進し、其の文明を進める上に於て互に競争する事が出来るのである。商業上の競争、工業上の競争、文學美術上の競争、總べて此れである。此れを要するに平和が人類の最大目的である随つて各國の國民もソコに主眼を定めて活動せねばならぬ。固より今の時代に於て、孰れの國家も軍備を忽せにする事が出来ぬのであるが、其れと同時に平和克復と云ふ事以外、戦争をなすべき道理のない事と、濫りに戦を好むと云ふことは、只横暴的行動であるばかりでなく、罪惡の最大であると云ふことを深く思はなければならぬと信するのである。

國際平和と日本國民

前代議士 江原素六

忠君愛國の精神は、日本國民の根本道徳にして、殆んど建國以來終始一貫渝ること無く、恐くは又永遠の未來に傳へて侍る所なき美德なるべし。只世人往々にして忠君愛國の眞義を解せず、誤つて之を偏狹固陋なる島國根性と混同し、若くは之を曲解して世界人道の精神と柄鑿相容れざるやの感を抱く者あるは、實に大なる謬見と謂はざるを得ず。忠君愛國の精神は決して世界人道の思想を矛盾衝突する者にあらずして、寧ろ之と互に補足し融合して始めて其眞義を發揮する者なり。維新以來 今上陛下に開國の皇謨を垂れ給ひ、智識を四海に求め、交誼を列國に厚うし、内は一國人の發達に努められ、外は列國輯睦の基礎を固うせられ、偏へに天下民衆をして平和を樂ま

事むるを念とせられたり。不幸にして屢々干戈を動かすの止むなきに遭逢したりしも、
 皆是れ一國防護の爲め、東洋平和の確保の爲めにして、平和を思ふの聖慮は、暫くも
 渝り給ふ事なかりき。畏れれども、陛下の聖慮は、即ち臣子の心にして、日本國民の
 最大多數も亦平和の愛護者を以て、自ら居所高からずんばあらず。蓋し、陛下の思召
 を濟すは臣子衷情の喜びとする所なれば也。近くは萬國平和會議に參列の命を蒙りた
 る都筑大使に對し、下し給へる大詔を拜誦するも、如何に、今上皇帝の世界平和に眷
 々あらせらるゝやを恐察し奉るに難からず。上に暴君庸主ありて侵略を惟れ念とする
 邦國と全く異りて、我が日本帝國の君民は同心一體、人類全般の幸福を増進する正義
 公道の爲めに努力を傾倒するを得るは實に至幸と謂はざる可からず。忠君愛國と博愛
 人道は日本の國情毫も矛盾する所なく、忠君愛國の精神を推擴して、博愛人道の事業
 に貢献するは、寧ろ君子の本分たる所以の理は明かに了悟す可き所なり。

本來偉大なる國民と謂ひ國家と謂ふのは、必ずしも領土の擴大、富力の充實、軍備

の強盛を指すものにあらず。眞に偉大なる國家と國民とは、その道德的品質と、その
 世界文明に寄與する程度とに依り判断せらる可き者なり。此意味に於て日本國の前途
 は、實に洋々の前途を有すと謂はざる可からず。國家民人の奮勵努力に依つて、人類
 の進歩に貢献する事業は、その成功一朝一夕に求め難く、全く不斷の向上心に依る。
 而して此の種の事業多々ありと雖、戦争の禍殃を絶ちて人類同胞の眞義を發揮せんと
 する平和事業の如きは、最も重要にして崇高なる者と謂ふべし。日本國民は由來仁心
 に富むと稱す、この仁心を開展して世界人類の利福を謀るは、素より自然の要求たる
 ざらんや。日本國民は由來平和を愛すと稱す、平和の愛護者たる自覺は、善んを單に
 他國の侵襲に依つて始めて喚起せらる可けんや。太平無事の日に於て特に之を愛重す
 る精神を發揮す可き筈なり。故に予は日本國民を擧げて、平和運動の旗を負ふの義務
 と責任の存するを想ひ、之を喜びとする氣風の天下に普ねからんを冀ふ。況んや時代
 の要求、人道の使命、刻々に吾人を警醒するものあるに於てをや。

平和主義にも二種類あり、一は破壞的にして一は建設的なり。絶對的に非戦論を唱へ單に戦争を呪詛し軍備を攻撃し、之は依つて平和主義の主張となす者は、破壞的論者なり。此主張の中には素より大なる眞理を包蔵せざるに非ず。その人心を啓發する効力は素より藐視す可きにあらざるも、吾人の立場は之と異れり。吾人は此種の破壞論に依つて、戦争の遂に廢絶し難く、平和の容易に期待し難きを信する者にして、吾人の希望は一に建設的平和説に繋る。建設的平和説とは、根本的に戦争に依つて起る原因を救済し、又國際間の紛争を解決すべき實際的設備を完成し、又努めて軍備と戦争とに伴ふ禍害を減縮せんとするに在り。この根本的にして且つ實際的なる問題の解決法を講明し、之に依つて戦争の慘禍より人類を救ひ出さんとするは吾人の根本目的にして、單に破壞的言論を弄ぶは吾人の本旨にあらず。我が大日本平和協會は、極めて幼稚なる團體なり。その勢力は今日に在りては素より微々たる者なり。然れども此建設的平和主義の鼓吹に依つて、天下有識者の賛助を得、その勢力を増進して前途の

使命を成就せんことは、吾人夙夜の祈願にして、又日本國民衷心の志望と信する所なり。「平和會員」は宜しく斯の道の爲めに奮つて努力す可き者なり。

日本國は戦捷の光榮に依つて、世界一等國の班に列するを得たり。然れども文化の産物に於て、又國民の品性に於て、深く自ら顧みる時に、誰か向上進修の必要を痛感せざる可き。今日の民情に於て、吾人は猶ほ未だ世界的風格の熟せざる所多きを想ふ。外國人に對する禮儀の美習すらも猶ほ甚だ缺けたる所あり。平和協會はその事業の一面に於て世界の市民としての國民的品性を作るべき任務をも有せずんば非る也。

世界平和の目的は如何にして成就せらる可きか

法學博士 浮田和民

平和主義を唱ふる人古來正義博愛の士に多きは事實である。孔子も平和主義、釋迦も平和主義、基督も平和主義であつたが今に平和主義の實行せられざるは何ぞや。他なし、平和は世界終局の目的であつて其事たるや至大至難の事であるからである。從來平和主義を唱ふる人徒らに戦争の殘忍なることを説き抽象的に正義を唱ふること多かりしため一向其實を擧ぐる事は出来なかつた。併し乍ら今日世界の形勢が結局戦争の全廢、正義の勝利に歸せんとするの徵候著大なるは海牙平和會議及仲裁裁判制度の成立したる事である。併し乍ら永久的平和の成功するまでには幾多の困難がある。即

ち世界の永久的平和は人類の同化と云ふことを必要條件とするものである。然るに人類の同化と云ふことは一朝一夕に成就せらるべきことではない。先づ人種上の軌轍がある。次に宗教上の衝突、經濟上の衝突、政治上の衝突等ありて動もすれば平和を破り戦争を惹起することになる。此時に當り單に戦争の不道理なることを唱ふるのみにては何等の効能もあるまいと思ふ。固より漸次世界の輿論を動かして戦争を止めしむることになる端緒として全く無効ではないけれども其効驗が薄い。我輩の考にては人類の同化を促がすべき種々の實際的手段があると思ふ。

第一、平和會議及常設裁判制度を發達せしめ之を益々有効ならしむる事

第二、萬國郵便電信及傳染病豫防に關する國際協力を増進せしむる事

以上は既に多少實現されて居る事なれば之を令一層効力あらしむるの方法を講ず可きである。

第三、萬國度量衡及貨幣を均一にする事

第四、萬國自由貿易の成功する時期を促がす事、今日列國は平和の際なるに係らず、各々關戰爭をなして居る。或る場合には重き關稅を課すること一國の商工業を保護する所以なれども概して少數商工業經營者の利益となるのみにて多數國民(消費者)の不利益となるものである。況んや一方で關稅を課して他國の商工業品を拒絶すれば先方で又た報復的關稅を設けて復讐するから保護主義の目的は一方に成功しても他方に失敗することは必然である。我輩は國際的自由貿易主義の成立せざる限り平和主義の實行は空想であると思ふ。

第五、列國共に一定の制限を設け其制限に戻らざる以上人種、宗教及國土の差別を問はず、歸化、結婚及び移住の自由を認識する事、凡そ外人の歸化、結婚及び移住は列國の状態如何により無制限に許可する譯にはいかない。疾病、貧困、犯罪、無教育、不道德及び無能力(癡癩白痴)等の事故ある者には之を拒絶すべしと至當の事である。然るに此等の原因を外にして世界は未だ歸化、結

婚及び移住の自由を與ふことが出來ない。半開野蠻の國がそうであるのみならず、一等文明國を以て稱せらるゝ國に於てすら同様の事實が存在して居る。されば此等の障害を除かぬ間は兎ても世界永久の平和を望むことは出來ない。

凡そ戰爭ほど世に馬鹿らしきことはない。戰爭によりて愛國心を激勵し又は公共心を發展すると云ふ様では人類開化の程度如何に劣等であるか、分る。併しながら戰爭は抑も一の大なる結果であるから先づ其の原因をば取り除かすしては何時まで戰爭の害惡を説いても無効である。先づ前述列記の人類の同化を成就せんとするには人種的偏癖及宗教的偏癖を一掃せねばならぬ。人種が違ひ宗教が違ふから人民として同化する事の出來ぬ間は平和主義の實行は望む可からざる事である。皮膚の色澤が如何に相違しても人情は同じである。又た理性も同じであるから教育さへすれば如何なる異人種でも人類として同化の出來ぬ筈はない。又、宗教が如何に相違しても宗教の奧義

は何れも同じである、又宗教に基く道徳にも人を殺し人を憎むことを是とするものはない。然るに東西習慣を異にしたからと云つて西洋にては基督教のみを世界唯一の眞・正なる宗教となし、又東洋にては回教、佛教若しくは儒教又は婆羅門教を最も完全なる宗教となし互に相排斥し、互に自他の信徒を我が宗旨に歸依せしめんとして厭がる人民にまで傳道し、其結果宣教師が殺され、國際談判となり、或は加害者の屬する國家より償金を出し、甚だしきは土地を割つて被害者の國家に讓與せねばならぬ様な事が正當とせらるゝ間いかでか世界の平和を望むことが出來やう、思ひもよらぬ事である。抑も神は白人の神であると同時に黒人の神である。黄色人でも赤色人でも神は一視同仁である。而して天國に入るの道は種々あつて基督教からでも、佛教からでも回教からでも何の宗旨宗派からでも到る所は同一である。此の如き見易き道理すら分らずして世界の宗教家が相争ひつゝある間は人類の同化は望まれぬ。何となれば世界中の人類が凡ての信仰、趣味に於て同一にならねば同化が出來ぬ様な事は何時まで

も世界の平和の成り立つ時はあるべからざる事であるからである。宗教や國籍や政體は相違のある方が世界進歩の擔保となり、人類發展の基礎となるものである。人類、宗教、政體其他の事は東西趣味の異なるが如く何時までも異なつて居て差支ないものである。余り世界が同一になり人類の活動が單調になることは世界人類の幸福を進むる所以ではない我輩は雜異の間に同一を見出し、自由の中に一致を爲し得る程に進歩するにあらざれば世界平和の要件たる人類の同化は望む可からざる事であると思ふ。

海牙會議へ送りし手簡

左の一文は第二回萬國平和會議々長に宛て、伯の送致したる意見書なり

伯爵 板垣退助

謹て書を議長閣下に呈す。予や極東の帝國に在て、念常に國際平和の問題を去らず、曩に一千八百九十九年露西亞皇帝陛下の提唱により、第一次の萬國平和會議の召集を見るに至り、今や再び露西亞皇帝陛下の提唱によりて、第二次の平和會議の召集せられつゝあるは、世界の平和の爲めに慶賀に堪えざる所也。

然れども若し備はるを君子に求むるを得せしむれば、予は此平和會議に關して少しく言はんと欲するもの無き能はず、何ぞや。願ふに水を防かんと欲せば、其源を塞ぐに如かず。既に葛藤を起して然る後に之を緩和するの道を講じ、若くは既に干戈を

交へて、然る後に其事の野蠻殘酷に陥るを防ぐと、直ちに葛藤の因を絶ち戰爭の災を除くと、其利弊果して孰れぞや。今や列國の主權者并に有司は其の學者識者と共に、國際平和の道を講ずる勉めざるにあらず。然かも國際間の紛糾は依然として滋く、戰爭の疑懼常に各國民を襲ひつゝあるもの、これ蓋し其源を塞がざるが爲也。

蓋し戰爭の原因三あり。一に曰く外邦侵略也。二に曰く貿易上の鎖國攘夷也。三に曰く異人種排斥也。大凡此三者にして除かれん乎。暴惡の國と雖、以て兵を他に加ふる能はず。世界の民は共通共辨の道によりて、限りなく其生を樂しむに至らん。

抑も國を建つるの目的と、人類共通共辨の道とは、互に兩立すべきものにして、若し國を建つるが爲めに人類共通共辨の道に反せば、其國を建つるや斷じて正義にあらず。而して外邦侵略なるものは、專制武斷政治の生む所にして、自由立憲の政治にあつては稀に見る所也。蓋し一國に在て最も多く戰爭の苦痛を嘗むる者は一般人民なるが故に、多くの場合に於て戰爭は人民の敵なり。されば眞に自由平等にして輿論に決

を採るの國に於ては、平和主義常に捷を奏し、人民の權利と利益とを無視して輿論を尊重せざる所の專制武斷國に在つては、侵略主義常に勢を張るを見る。是故に平和主義は專制主義と両立せず。人類共通共辨の道は、侵略主義と相容れず。全國民の安寧幸福を擧て、一人の意志に殉ふる所の政治上の形式は、國際間の平和を來すには極めて不便不利なりと言はざる可からず。

貿易上の鎖國攘夷に於ても亦然り。今日は實に列國間に於ける關稅戰爭の時代にして其互に疊壁を高くして相抗争するの狀態に慘憺たるものあり。而して斯の如くして相抗争するの極、終に武力によりて廣く自國の領土殖民地、若くは勢力範圍を求め、以て貿易市場を獨占せすんば休まず。即ち諺に所謂「貿易は國旗の影に従ふ」と言へるもの、よく此の間の消息を道破せるものにして、軍隊を以て貿易市場を獨占せる結果、擅に關稅の率を高め、以て貿易上の鎖國攘夷を行ひ、終に國際間に於ける平和を破るに至る。是故に苟くも國際間の平和を保たんと欲せば、萬國平和會議に先づ先づ萬

國關稅會議を開き、一國の産業を保護するの程度以上に、人類共通共辨の道に反せる不當なる關稅を課せざらしめ、以て豫め經濟上より生ずる所の國際間の紛糾を除去するの必要あり。

人種問題も亦戰爭の原因也。蓋し天の人類を見る一視同仁にして、未だ曾て人種上の區別あることなし。されば苟くも其國の法律に抵觸せざる限りは、何れの國に行き何れの所に止るも、そは天を戴き地を踏む所の人類天賦の權利にして、之が爲めに未開の國に於ては治外法權の保護あり、文明國に於ては其國の法律の保護あり、以て安んじて業を執り生を營むことを得せしむ。然るに或る一國にして、この人類天賦の權利を無視し、人種的惡感情や若くは利益獨占の主義により、外國人の其國に移住するを禁じ、彼等を迫害して其生を安んずる能はざらしむるに至りては、これ人類共通共辨の主義に悖ること甚だしく、到底人道の上よりこれを許容す可きにあらず。故に苟くも國際間の平和を欲せば亦須らく列國の協議により、異人種排斥の如き不法暴戾を

去り、以て之れより生ずる所の紛擾の原因を除去せざる可からず。

以上は即ち國際戦争の縁て起る所の原因を指摘せるもの也。思ふに戦争の原因にして除かれずんば、國際間の平和は遂に望む可からず。國際間の平和にして望む可からざれば、列國は平和の時に在りても、常に武装を爲し、以て萬一に備ふるの必要あり。然かもこの不斷の武装、即ち換言すれば武装的平和の重荷は、人民の負擔を増し、之をして塗炭の苦みに陥らしむ。斷して人道の政にあらざる也。

然るに單り異む。世界の識者にして今日に至るまで、未だ曾て具體的に戦争の原因を除去するの道を講ずるものあるを聞かざるを。思ふに國際間の紛擾の起るを俟ちて、然る後ちに之を仲裁々判に附し、若くは既に鐵火を以て相見ゆることを許し乍ら、其の野蠻殘酷に陥らんことを憂へて、ダムダム彈を禁じ、海陸諸戦争の法規を定むるが如きは、寧ろ本末を顛倒せるものに非らずや。勿論之あるは之なきに優るや萬々なりと雖、眞に國際間の平和を希望するものは、決して之を以て満足すること能はざる也。

殊に今次の平和會議に於て最も重大なる問題として受入れられんとする所の軍備制限問題の如きは、予は其成立を望むや極めて切なるものなり。たゞ列國にして根本的に戦争の原因を除かざる限りは、戦争の必無を期するを得ず。戦争にして必無ならざる限りは、列國はまた各之れが備を牢ふするは勢の免れざる所にあらざるか。

然らば即ち之を爲す如何。曰く須らく先づ列國の委員を會し、世界の君主專制の國に對しては、自由立憲の政治を採らしむるに勉め、關稅の問題に關しては、萬國關稅會議を開いて之れを衡平にするの道を講じ、人種問題に關しても亦列國會議を召集し、國際的に之を解決すべきのみ。これ即ち本を抜き源を塞ぐの道也。

予や此の意見を懷抱すること久し。今や第二次萬國平和會議の召集せらるに方りて、之れを我が崇敬する所の議長閣下に致す。若し予の意見にして閣下並に賢明なる委員諸君の賛同を得て、些少たりとも國際平和の爲めに貢献することを得ば。予の光榮や大なり。予は此機會を利用して重ねて議長閣下、并に人類の最も高尚なる目的の爲め

此會議に列席せられたる列國の委員諸君に對して深厚なる敬意を表す。
一千九百七年五月八日

平和論集

明治四十四年十二月
明治四十四年十二月
印刷
發行

定價金拾錢

編輯者兼發行者 大日本平和協會

右代表者 東京府桂原郡上大崎町七八四 富山 接三

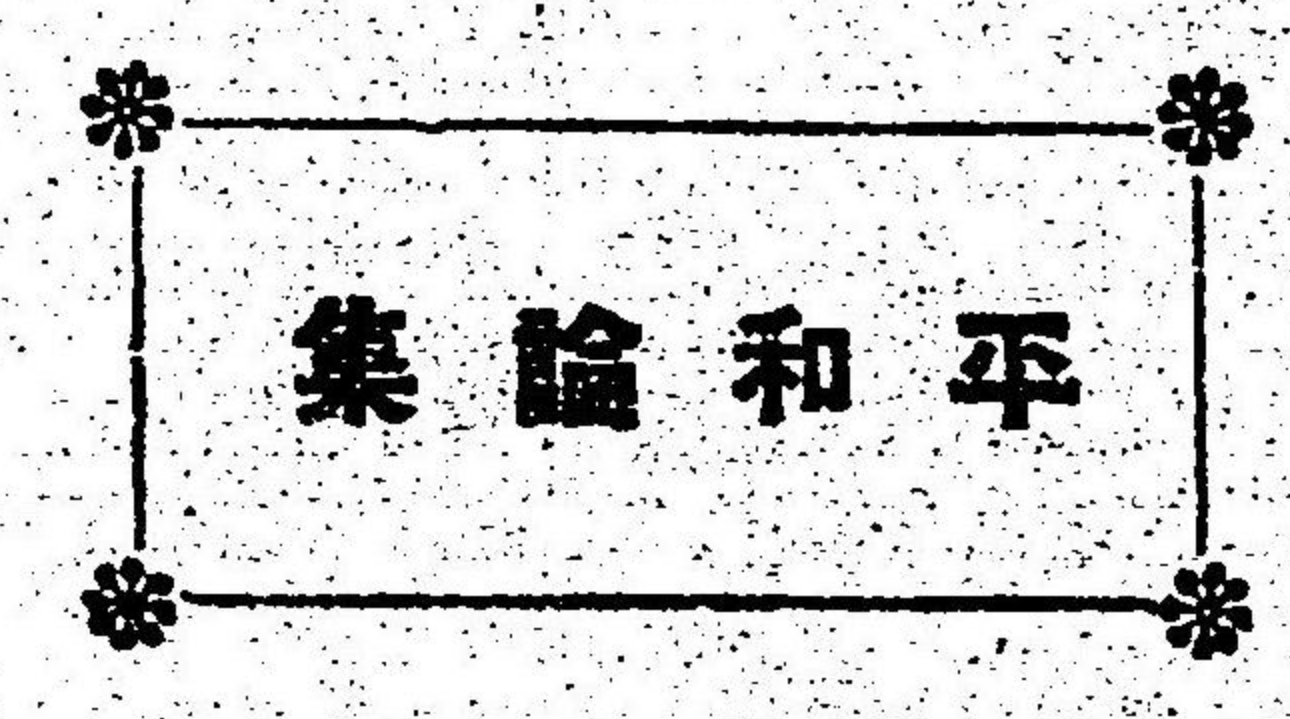
印刷者 東京市神田區美土代町一ノ二 池田 勝四郎

印刷所 東京市神田區美土代町一ノ二 立教社

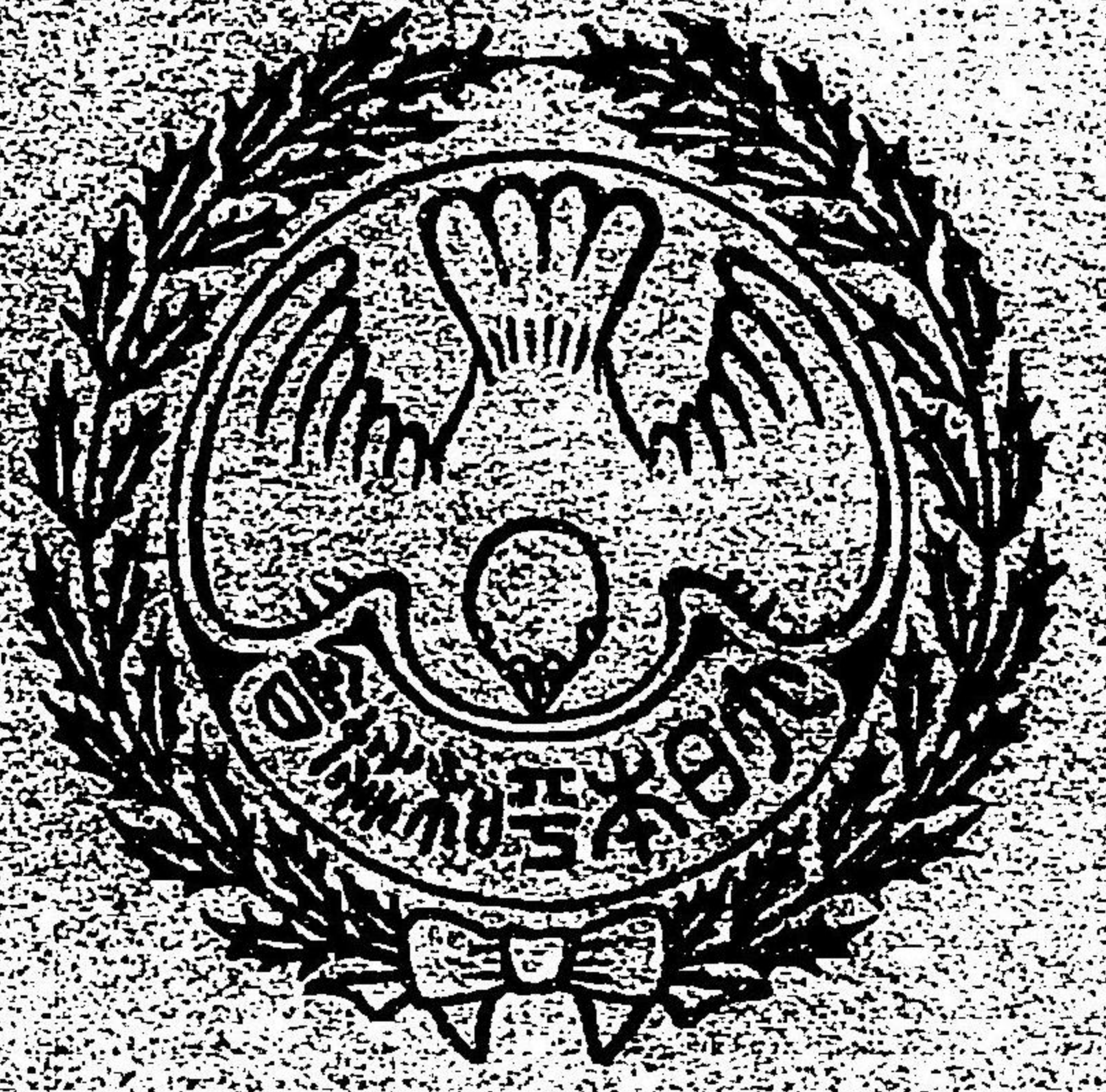
東京市神田區美土代町三丁目三番地

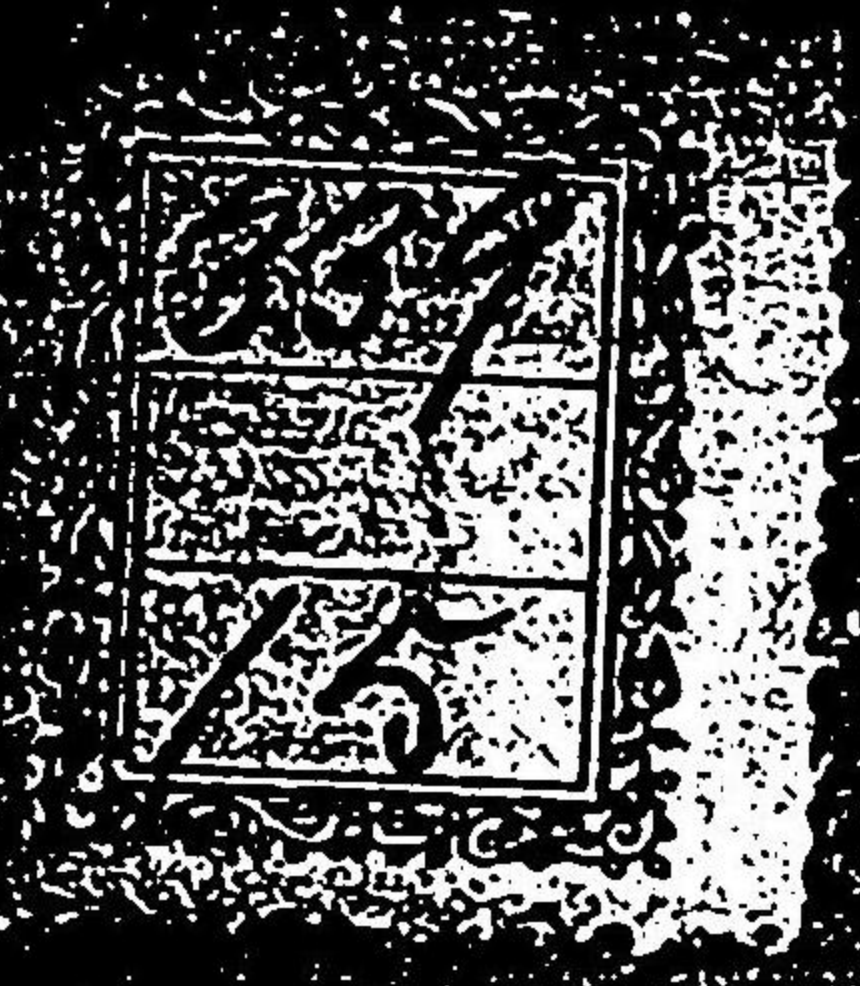
大日本平和協會

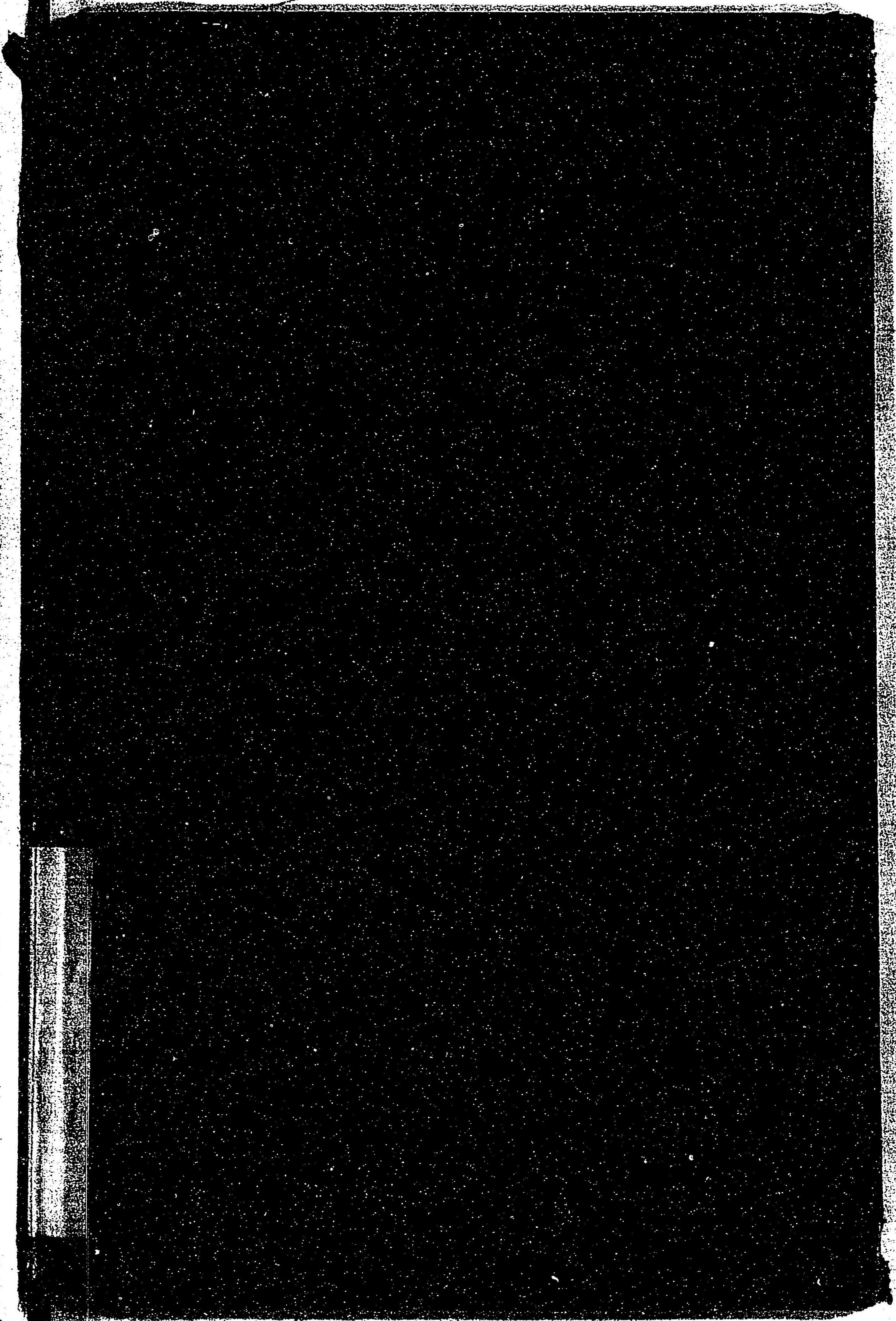
發行所



389
75







029600-000-3

339-15

平和論集

大日本平和協会

M44

BAG-0148



